【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和7年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

学校名	佐賀市立川上小学校

1　前年度 評価結果の概要	・教職員の積極的な研修への参加、また全教科・領域を対象とした校内研究の充実により、全ての職員が自らの授業改善や授業力向上に努めることができている。また、体育やICT等堪能な職員が自ら職員が気軽に参加できる研修を開催したことも、本校にとっても大きな成果となった。一方で、学年間のバランス等を考慮せず、ICTを活用した個別学習に頼りすぎた授業となっている学級もあることから、「個別最適な学び」の意義について、再度共通理解を図ることが必要である。次年度は、このような授業づくりに人権・同和教育の視点を取り入れ、授業研究を進めていきたい。 ・いじめの定義について、改めて研修を通し確認したことで教職員のいじめに対する意識も変わり、いじめや気になる児童への対応について、小さな芽の段階から適切に対応してもらっているため大事に至ることがない。こうした取組が、児童の安全・安心な学校生活につながっている。 ・コミュニティ・スクールとなり、地域との連携がこれまで以上に充実し、学校運営にも大きな効果をもたらした。日常的な学校生活においても様々な関わりを築くことができているため、今後も、こうした取組を継続・拡大させていきたい。
2　学校教育目標	みんなが笑顔の楽しい川上　「自分大好き　友だち大好き　川上大好き」　な児童の育成
3　本年度の重点目標	1　生活及び学習の基礎基本の力の育成と定着～自分大好き～ 2　自尊感情の醸成～友達大好き～ 3　「川上コミュニティスクール」を基盤とした地域・家庭との連携強化～川上大好き～

4　重点取組内容・成果指標　／　中間評価　／　5　最終評価

(1)共通評価項目

重点取組 評価項目	重点取組 取組内容	重点取組 成果指標（数値目標）	具体的取組	中間評価 進捗度（評価）	中間評価 進捗状況と見通し	最終評価 達成度（評価）	最終評価 実施結果	学校関係者評価 評価	学校関係者評価 意見や提言	主な担当者
●学力の向上	○基礎・基本の学力定着と児童がわかる喜びを実感できる授業の工夫改善	○各学年、市販テストの平均点を上回る。 ○授業が「わかる」「楽しい」と答えた児童80%以上 ○授業改善に向け、具体的取組を実践できている教員80%以上	・隙間時間や授業開始時のデジタル教材による学習の充実 ・複数担任制による教材研究の充実 ・校内研究の時間での、具体的取り組みの進捗の共有と改善。	B	・電子黒板や学習用端末を効果的に活用できている旨答えた教職員が67%だったことから、効果的に活用できていない考えている教職員が多い。そのため、教員間で使用の仕方を交流するなど、効果的な活用方法について研修等を実施していく。 ・一つの教科を同じ教員が複数のクラスで実施することで、教材研究を効率的に実施することができている。 ・授業が「わかる」と回答した児童が91.5%、また、授業改善に向け、具体的取組を実践できていると回答した教員が96%だったことから、より分かりやすく楽しい授業づくりに向け、今後も授業改善を図っていく。	A	・授業をがんばっていると回答した児童は97%で前期よりも3ポイント増加、また、授業が「わかる」と回答した児童も94%で3ポイント増加していることから、教師が児童の実態に応じて教材研究や授業づくりを工夫している結果だと考える。しかしながら、それに対して学力が伴っていないところもあるため、その時点でわかっていても、定着してないと考える。よって、児童の学力定着につながる授業づくりに努めていく必要がある。 ・「まなびポケット」の導入により、どの学年においてもアプリが導入されたものの、担任以外の教員は授業で効果的に学びに活用することができていないため、担任と連携しつつ、効果的な活用について情報共有を図ることで、利活用率を高めていきたい。	A	・複数担任制の取組は、得意分野での活躍が期待され、素晴らしいと思う。 ・職員同士の「接続」がうまく機能しており、児童の意欲的な学びにつながっていたと思う。 ・ICTを活用しながら子ども達の関心を寄せるための工夫がなされていたと感じる。 ・学びを深めるためにも「楽しい」と思う感情を芽生えさせる事がとても大切であり、楽しさの共有、自己肯定感を育むこととして、学校だけでなく家庭との連携（川上っ子チャレンジ）なども効果的であったと思う。	かしこい子育成部 研究主任 教務主任
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「たてわり活動」や「異学年交流学習」について肯定的な回答をした児童80%以上 ○学級や学校に対して肯定的な回答をした児童80%以上	・全学年、授業参観で「ふれあい道徳」を実施し、家庭と連携して、道徳的価値の意義や意味などについて共有させ、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。 ・あおば活動や異学年交流活動の設定の工夫 ・人権総合学習を中心に据えた人権教育やいじめ命を考える日の取組の工夫。「ぼかぼかの木、ぼかぼか放送」	A	・自他の良さを認めあう取組を実施していると回答した教職員が100%であり、道徳や人権教育を中心に、道徳的な判断力や心情等を育む実践ができている。 ・「ほかの学年の人と交流する活動や学習はよいと思う」と回答した児童は90%であった。これからも、異学年交流のよさが実感できるよう、取組の工夫改善に努めていく。 ・「自分の教室・学級は安心できる」と回答した児童が90%いたものの、10の児童が安心できていないため、個害要因を取り除き、全ての児童が安心して過ごせる学級づくりに努めていく。	A	・学校が楽しいと回答した児童が94%と前回よりも4ポイント近くも増加した。各教科に人権教育の視点を取り入れ授業を実施したことが、児童の安心・安全な学校生活の一助になったと考える。 ・運動会等の行事や生活科、総合的な学習などの各教科、また、あおば班活動において異学年交流を積極的に実施してきたことで、交流することのよさを感じている児童は前回よりも4ポイント増加し93.6%となった。今後も、異学年交流のよさを味わうことができるよう、年間計画に位置付けるなど計画的に実施していく。	A	・何より「学校が楽しい」と答える子どもが増えていることが素晴らしい。 ・異学年交流を実施することで、思いやりや共感する態度が生まれ、そのよさを実感する児童が増えている。このような取組が計画的に実施できていることが素晴らしい。	やさしい子育成部 人権・同和教育担当 児童生徒支援員 教務主任 あおば活動主任
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等（いじめの定義、いじめの未然防止・早期発見・早期対応のための取組、事後対応等）について、組織的対応ができていると思う教職員90%以上	・生徒指導協議会を中心に、気になる児童やいじめについての共通理解を毎月実施。 ・定期的なアンケートの実施。 ・Q－Uテストの実施と、結果の分析・学級経営のための研修会の実施。	A	・毎月の生徒指導協議会において、事実や気になる児童について協議・共有したことで、職員間の連携を深めることができた。 ・毎月の心のアンケートや、学期ごとのいじめアンケートの実施により、いじめの早期発見・対応につなげることができている。 ・Q-Uテストの結果についての研修を実施したことで、学級の課題が明らかとなり、課題解決に向けた手立ての構築につなげた。	A	・生徒指導主事を中心に、気になる児童についての情報共有を密に行い、いじめの未然防止や自他のよさを認め合う集団作り、また、児童理解に努め共感的・受容的態度で接することを心掛けた。事案への対応については、チームとして対応してきたことで、93%の児童が自分の教室・学級を安心できる場と感じている。 ・Q－Uテストの結果について職員間で情報交流することで、各クラスの課題の共有につながり、対応についてはチームで取り組むことができたため、学級担任の負担軽減にもつながった。	A	・早期発見に尽力されていたと感じる。 ・「いじめゼロ宣言」を行っている学校づくりはとてもよいので、今後も継続してほしい。 ・いじめについて、子ども達の間、家庭や職員間など、各々のチームで取り組みを考えたり、共有したりする風土を継続していく事が、よりよい学校生活につながると思う。 ・保護者へのアンケート、児童生徒への個別の聞き取り等、様々な取組がなされ、また、未然防止にも努められていることが子ども達の安心感につながり、落ち着いた学校の様子になってきている。 ・保護者のいじめに対する認識が気になるところ。	やさしい子育成部 全職員
	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●◎「将来の夢や目標を持っている」と回答をした児童生徒80%以上	・児童の作品やノート等、日々の成長や頑張りを賞賛・価値づけするコメント記入。 ・キャリアパスポートと連動させた毎学期の目標設定や自己の成長の振り返りにより、児童一人一人の自尊感情を高める。	A	・先生はあなたのよいところを認めてくれていると回答した児童が92.5%であった。多くの児童が認められていると感じているものの、8%弱の児童は自尊感情を高めることができているため、「ほめるからはじめる、はじまる」を合言葉に、その子の自己肯定感が高まるよう、良さにしっかりと目を向け、「ほめほめの木」を効果的に活用していく。 ・自分の夢や目標を持っていると回答した児童が86.8%であることから、学級活動や日々の取り組みの中で、将来について考える時間を設定していく。	A	・先生から認められていると感じている児童は95.8%と前回よりも高い数値となっている。しかし、それでもなお、依然として認められていないと感じる児童がいるため、日頃から、その児童を認める声掛けを頻繁に行うなど個別に対応していくことで、自己肯定感を高めていきたい。 ・自分の夢や目標をもっている児童は87%程度であった。全ての児童が自分の将来について具体的に考えることができるよう、学級活動などで職業について学ぶ機会を設けたり、ゲストティーチャーを招聘し、将来についての話を聞く機会を設けたりするなど、キャリア教育を充実させることが必要である。	A	・ほめられることで、自己肯定感が高まり、人格形成に大いに寄与すると思われます。 ・子ども達に平等に夢につながる場を設けているので、今後もキャリア教育の充実に努めていただきたい。 ・先生から認められることが、児童にとっても良い環境となっている。	各担任 教務主任 全職員 かしこい子育成部
	○地域連携活動の充実による児童の自己肯定感とふるさとと愛の向上	○地域の方との触れ合いや学習について肯定的にとらえている児童90%以上	・地域人材を活用した教育活動の充実 ・地域の方に認められる学習の場の設定 ・クラブ活動の地域展開・地域連携	B	・地域と連携した単元づくり等が実施できていると回答した教員が80%であった。地域の人と一緒に学んだりできることはうれしいと感じている児童が93.4%いることから、地域人材等について、職員への周知を図り、より一層連携を深めていけるようにしていく。	A	・地域と連携した単元づくり等が実施できている教員は87%であった。これまでの取組を踏襲し、実施している教員がいる反面、新たに計画・実施しようとする教員はなかなかいない。よって、教員が見通しをもって地域と連携した取り組みを計画することができるよう、地域人材についてジャンルや特技等についてわかりやすく示していく。 ・94.9%の児童が地域の人と一緒に学べることが嬉しいと感じているため、これからも積極的に地域との連携を図っていく。	A	・地域とのつながりが特に深いという地域の特性を活用していただき、老若男女を問わない世代を越えた中でしか感じられない学び、経験を子ども達の成長の一部としてもらいたい。 ・地域の人との交流が、地域を自慢に思う子どもの育成につながるため、今後も積極的な関わりをお願いしたい。 ・教員が前向きに地域と連携した取り組みを行ってい	各担任 教務主任
●健康・体つくり	❷「望ましい生活習慣の形成」 ○あいさつ、返事 ○礼儀正しい言葉遣い ○人、もの、場を大切にできる子	○「自分から誰にでもあいさつをしている」「名前を呼ばれたら返事をしている」「礼儀正しい言葉遣いをすることができる児童80%以上 ○くじ自分のことも他者のことも大切にできたと思う」児童85%以上 ○授業や行事など、集団で行う活動を大切にしている」児童80%以上	・教師の率先垂範と全職員による徹底指導 ・挨拶がよくできている児童を「ほめほめカード」により放送で紹介。 ・生活のめあてと連携し、礼儀正しい言葉遣いについて、月1回の生徒指導協議会で共通理解を図る。 ・行事等実施前には、担当（担任）が活動の意義や目的等について、全体に共通理解を図っておく。	B	・「いつでもどこでもだれにでも」自分からすすんであいさつをしていると回答した児童が85.3%、「返事」ができちんとできていると回答した児童が89%、そして、丁寧な言葉遣いができていると回答した児童が89.7%であった。児童は自分ではよくできている回答しているものの、あいさつなどは、昨年度に比べ、よくできている児童が明らかに減っているため、教師が率先垂範することで、手本を示していく。 ・友達はあなたのよいところを認めてくれていると回答した児童が91.5%であったことから、お互いを大切に思いやる気持ちが育まれてきていると考える。	A	・自分から進んであいさつをしている児童は91.4%と前回に比べ6ポイント増加した。また、返事についても90.4%の児童ができていると回答していることから、できていることは称賛しつつ、さらにレベルアップしていけるよう、地域の方から直接ほめていただく機会を設けたり、がんばっている児童を放送で紹介したりするなど自己肯定感を高めつつ、意欲付けを図っていきたい。 ・先生には丁寧な言葉を使っている児童は92.7%であったものの、子ども同士での言葉遣いについては、相手を傷つけるような言葉を日常的に耳にすることが多い。そのため、普に対しても丁寧な言葉遣いができるよう、日頃から教員が手本を示しつつ、指導を徹底していく必要がある。 ・友達から認められていると感じている児童は90%と前回よりも1%程度低い数値となっている。自己肯定感の低さが、お互いを思いやる気持ちの低下にもつながっていると考えられることから、「ほめほめの木」など、自己肯定感を高める取り組みをより一層充実させていきたい。	A	・登校見守り時に、一定に「がんばってください」と声をかけてもらい、とてもうれしく思っている。 ・挨拶はお互いの心の扉を開く合っかけになる。 ・朝の挨拶では100%に近いが子ども達が挨拶をしている。その中でも、数パーセントの子どもができていない、これは性格的なものもあるかと思う。地域の方から、下校中にくく挨拶をするようになったという声を聞く。	生徒指導担当 教務主任 安全担当 各担任
	○毎日歩いて登校	○自分の足で歩いて登下校している児童95%以上	・保護者への歩育の推奨とPTAへの周知	B	・自分の足で歩いて登下校していると回答した児童が90.9%であった。特別な配慮が必要な場合以外については、全ての児童が自分の足で歩いて登校することができるよう、保護者理解を促していきたい。	A	・自分の足で歩いて登校できている児童の割合が93%と前回よりも高くなっていることからも、保護者への啓発の効果があらわれてきている。よって、今後も、「歩育」を保護者に呼びかけ、特別な事情を除いては、全ての児童が歩いて登校できるようにしていきたい。	A	・一部の保護者が毎日車で送迎をしていることが気になる。	教頭　教務主任
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ●年間20日の年次休暇のうち、職員1人当たりの年次休暇の取得日数14日以上	・特定の教職員に業務が集中しないようにマネジメントを行う。 ・定時退勤日を設定する。 ・稼業日であっても、年次休暇を取得しやすいよう、休暇取得を推奨する。 ・長期休業中に7日以上の連続休暇が取得できるよう、研修等の調整を行う。	B	・夏季休業中は、前半・後半に研修を集中させたことで、年次休暇がまとめて取得できるようにしたが、年次休暇の取得については平均5.5日であった。研修の在り方や、夏季休業中の勤務形態について、再度検討し、気兼ねなく休みがとりやすい環境づくりに努めていく。	B	・年次休暇の平均取得日数が11日であり、年間取得日数の14日以上を達成できなかった。 ・長期休業中には、1週間以上のまとまった休暇が取得できるようにしたことで、全職員が7日以上の休暇を取得できた。 ・稼業日であっても、自己都合による年次休暇等が取得しやすい職場環境を整えていく。	B	・管理職から休みを取りやすい職場環境づくりを工夫して行っていく。 ・休暇の取得率をあげること、次世代の新規人職者へのPRとなる。 ・長期休業中の研修等を工夫し、先生方の年休取得が増えることを望みます。	教頭　教務主任
	○働きやすい職場環境づくり	○「本校職員室は雰囲気がよく働きやすい」「管理職や同僚に相談しやすい」職員90%以上	・地域人材活用やICT利活用、複数担任制等による業務改善 ・職員レクの実施による横のつながり、若手メンターの設置、風通しのよい職員室、校長室	A	・困ったことや悩み、不安など管理職や同僚に相談することができると回答した教員は100%であった。定期的に職員レクなどを実施し、職員間の良好な関係作りを図ってもらえているため、何かしら、悩みを抱えてもそれを相談できる雰囲気作りができていると感じる。	A	・「報連相」を合言葉に、何かささいなことでも情報を共有し合う体制づくりができたことで、一人で抱えこむことなく、チームとして対応することで学校のチームカが向上してきたと考える。 ・次年度はメンバーも入れ替わるが、「チーム学校」を合言葉に、組織力の向上を図っていく。	A	・「チーム学校」の合言葉の向上を図っていくことで、さらに職場環境が良くなっていくと思う。 ・先生方の雰囲気が良くて、とても嬉しい。	校長・教頭
●特別支援教育の充実	○教職員の専門性の向上及び外部専門家・専門機関との連携	○「特別支援教育についての専門性が向上した」「特別支援学級児童や気になる児童への対応力が向上した」教職員90%以上 ○外部専門家・専門機関との連携10回以上	・全職員参加の職員研修の実施。 ・気になる児童について、毎月情報共有の場を設定。 ・関係機関との連携の充実	A	・春季休業中に特別支援に関する研修を実施し、職員間での支援や対応について共通理解を図ることができた。また、夏季休業中にも同様に研修を実施したことで、1学期の取組について振り返ることができた。	A	・研修で学んだことをもとに、特別支援コーディネーターを中心とした定期的な情報共有の実施、また、スクールソーシャルワーカーや大和特別支援学校など、専門機関との連携を密に行いながら、児童一人一人の理解を図ることで、一人一人の状況に応じた支援の充実につながった。	A	・効果的に連携ができており、支援の充実につながっている。 ・新たな児童生徒支援の組織が増えたと聞いているので、そうした情報を的確に把握し、積極的に連携していくことを望む。	特別支援CO 各担任

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組 評価項目	重点取組 重点取組内容	重点取組 成果指標（数値目標）	具体的取組	中間評価 進捗度（評価）	中間評価 進捗状況と見通し	最終評価 達成度（評価）	最終評価 実施結果	学校関係者評価 評価	学校関係者評価 意見や提言	主な担当者
○人権・同和教育の充実	○自他を大切にする態度を養う。 ○互いの良さや違いを認め合い、共に生きる力を育てる。（多様性の理解）	・「自分のことが好きだと言える」児童85%以上 ・「友だちはあなたのことを認めてくれる」と回答した児童80%以上 ・校内研究において、人権・同和教育の視点を入れた授業を3回以上実施。	・道徳や学級活動において、命や友達をテーマにした題材を活用し、自尊感情や他者理解を深める。 ・校内研究を中心に、人権・同和教育を意識した授業づくりを行う。	A	・先生また友達からよいところを認めてもらえていることで、自己肯定感が高まり、自分のことが好きだと回答した児童79.6%につながっている。しかし、依然として自尊感情が低く、自分に自信をもてていない子がいるため、道徳教育等を充実させつつ、日々の生活の中において、その子のよさに目を向け、認める活動を仕組んでいく。	A	・教師や友達から認められることで、自分にも良いところがあると感じている児童は89%と前回よりも1ポイント増加した。自己肯定感の高まりが児童の自信につながるため、よさを認め合う集団づくりを行っていく。 ・人権教育の視点を意識した授業づくりを行うことで、相手を思いやる言葉かけがよく出るようになった。	A	・様々な場面で人権・同和教育に取り組んでいることで、児童の自己肯定感の高まりや、相手を尊重する態度の育成が図られていると思う。 ・人権の元は「命を守る」ことだと思う。普段の生活の中で、「いじめ」や「差別」を見抜いていくことが大切。	人権・同和教育担当 児童生徒支援員 教務
○コミュニティ・スクールの充実	○地域と協働した学校運営の充実 ・行事における連携 ・学習支援、特別活動への参画	○学校行事等における地域の方々との連携率を90%以上	・各学年、地域との協働による教育活動を実施する。 ・年間行事について、年度当初に共通理解を図る。	A	・学校における、学年や全校で取り組む様々な行事について、事前に協力依頼をかけたことで、ほぼすべての行事において、地域と連携して取り組むことができた。	A	・地域教育コーディネーター及び担当職員を中心に、各行事ごとに地域への参加を依頼してきたことで、どの学年の行事においても、地域の方々と連携して実施することができた。次年度は、参加いただく地域の方にも見通しをもって参加いただくことができるよう、事前に年間行事計画等を示すようにする。	A	・地域と協働することで、児童が育っていく環境が整っている。 ・とても良い連携が図られているので、もう少し若い世代も積極的に関わってこられるといい。 ・各行事に必要な人数等を把握し、事前に要請していけるようになるといい。	校長、教頭、地域Co

●…県共通　○…学校独自　◎…志と誇りを高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・児童の実態に応じ、教員が教材研究等を工夫改善しながら取り組んでいることで、児童も授業に意欲的に取り組むことができ、授業が「わかる」と感じている児童も増えてきている。さらに、子どもが学びの主役となって主体的に学習に取り組むことができるよう、教材開発や手立ての工夫を図っていく。一方、熱心に職務に励むことで、時間外勤務も増加傾向にあることから、職員の健康保持等のためにも、授業においてICT等を効果的に活用することや、学年間で教材を共有化することなどにより、働き方改革の推進を図っていく。 ・いじめや問題行動に対し、チームでの組織的な対応を行ったことで、大事にいたることはなかった。今後も「報連相」を合言葉に、組織的な対応をと掛け、児童が安全・安心な生活を送ることができる学校づくりに努めていく。 ・人権総合学習だけでなく、人権教育の視点を授業に取り入れるなど、人権を意識した学校づくりに取り組んだことで、友達だけでなく自分の良さに気づく児童も増えてきた。お互いを尊重する態度を養うことを通し、さらに自信をもって自分のことが「好き」と言える児童が増えるよう、さらに自己肯定感を高める取り組みの実践に努めていく。 ・子どもたちが社会全体とつながり学びを広げていくことができるよう、地域人材の発掘、地域産業との協働による授業等実施できるよう、コミュニティ・スクールとして地域とのつながりをより一層密にしていく。